

時代を読む

渡辺 利夫



「韬晦」^{とうくい}といふ言葉がある。韬が「包み隠す」、晦が「くらます」の意であり、つまり「才能や本心を隠して人の目をくらます」といった意味である。

一九八九年六月に起こった現代史の惨劇「北京天安門事件」で、中国はその非人道的行為に対して西側諸国から経済制裁を含む集中非難を受け、国際的孤立を余儀なくされた。この状況を見据えて、当時の最高指導者鄧小平は「韬晦」をもつて対応するよう指導者を諭した。「光を韬み養い晦す」、外国に悟られず着

実に力を蓄えて然るべき時に備えよ、と言つたのである。日本清戦争後の三國干渉の屈辱に鑑みて、才能や本心を隠して人の目をくらます」といった意味である。

中国「韬光養晦」の終えん

耐えて唱えられた「臥薪嘗胆」にも比すべき物言いである。近年の中国は、二十年間にわたって年率二桁の軍事費増加率で蓄積し続けた強大な軍事力を擁し、「韬光養晦」戦略を放棄して周辺海域への膨張を開始したとみていい。東

中国はこれらに抗しうる実力を自らのものとしたと確信したのであろう。日米同盟の対象地域である尖閣諸島で強行した漁船の衝突は、そのことを象徴的に示す事件であった。沖縄本島と宮古島との間が宮古海峡である。この海峡はすでに中国艦隊が宮古海峡を通過して太平洋へ進出した。東日本大震災で、日本が呻吟している最中の軍事的威嚇

船の確固たる進出路となってしまった。二〇〇八年十一月には四隻、〇九年六月には五隻、昨年四月には十隻の中国艦船が宮古海峡を経て太平洋に進出した。この十隻の艦船は海峡を通過後、冲ノ鳥島周辺で訓練活動を繰り返し、これを監視する日本の海上自衛

であることなのであろう。尖閣諸島であれだけの狼藉^{ろうせき}を働いたところで、日中間には何ごとも起こらないという「学習効果」を手にした以上、中国は今後とも南西諸島はもとより、東シナ海の日中間線近傍で同様の侵犯を起しこし続けるに違いない。

日本の民主党指導部には、

これに対抗する気概がまるでない。自衛隊員総数の半分を大震災救援に振り向けたことは致し方ないことであつたが、これによって生まれる周辺海域での「力の空白」を何

によって埋めるのか。震災後の外交は徹底的にここに注力され、然るべきであったもの

であった。「韬光養晦」戦略を放棄した中国には、日本人の神経を逆撫^{さかなぶ}でしても、もはや臆するところがないという

西沙、南沙諸島を着々と中國に押さえられ、南シナ海の制海権を握られて外洋への進出路を失いつつある東南アジア諸国との連携強化は当然のことであるが、その動きは何とも鈍い。もう一つの重要なテーマが日米同盟における集団的自衛権の行使容認だが、これに言及する指導者が野党を含めて今なお居ないのはどうしたことか。

大震災後の日本の外交不在は、中国の「核心的利益」の場を南シナ海からさらりと東シナ海へと拡張させつつある。中国の「韬光養晦」戦略はすでに放棄された。このことが怜悧に理解されなければならぬ。

(拓殖大学学長)